



泥の中の砂

柳瀬川ひろし

東南向きの校舎の窓に輪郭を失くし始めたわた雲が反射して輝いている。もうすぐ夕陽がそれを赤く染め始めるだろう。

Kは竹箒を手にとると丁寧に赤土質の固められた層が現れるまで表面を覆っている砂混じりの土を掃いた。

仕事が終わりに、子どもたちのいなくなった校庭で何度となく行ってきた儀式だ。邪魔する者はいない。

競い合う者もいない。指導者もいない。

風はない。ほぼ無風。何者の影響をも受けることなく跳べる。

掃き終わった校庭には、複葉飛行機の滑走路のような温かみのある直線コースが浮かび上がっていた。およそ30メートル。滑走路の終点は砂場だ。

砂場には木枠がはめられている。いや、木枠を設置してからダンプカーで運んできた砂を入れたのだろう。最近の砂場は縦5メートル、横10メートルといったところだが、ここの砂場は小さい。

私が端から思い切り跳んだなら着地の際、木枠が危険だとKは思う。

新しい砂が入ったばかりの砂場は、ある特定の子どもたちにとって人気の的だ。中には貝殻を掘り出して一時の宝物にする子もいる。けれど、くみこはきっと砂場が嫌いだろう。

Kは、くみこが砂場で眼を輝かせるところを見てみたいと思う。

新しい砂が運び込まれたばかりの、校庭の高さよりやや盛り上がった砂場が、Kは好きだ。

まずトンボで均すのが楽しい。土埃で汚されていない灰黒色の真新しい砂が、まわりに広がってゆく。

均しても均しても校庭より盛り上がっているその砂場は、跳躍を行う者に威圧感を与える。そして、決して良い記録を与えてはくれない。そのことがKに、もっと跳べるのだという自信を持たせてくれる。跳躍の結果がどうであれ、Kはここで跳ぶのが好きだ。自然に、負けるものか、もっと力強い跳躍をするのだという気持ちになる。

走路を掃き均したら踏切の位置を石灰でなぞる。縦幅は20センチ、横幅は1メートルくらい。砂場から1メートル手前にそのラインを引く。

助走路ができ上がったら脇にメジャーをセットする。踏切ラインの手前をゼロに合わせ、35メートルほど伸ばす。

今日も30メートル地点に目印の石灰を入れた。取りあえずのスタートラインだ。

砂場の脇にはトンボ、踏切ラインの横にはブラシを置き、10メートルメジャーを伸ばしておよそ6メートルの位置を確認し、砂場の中に石灰でラインを引く。

ここまでの作業をいつものように終えたKは、ジョギングをしながら体をほぐしてゆく。もう今は、くみこのことは考えていない。ジョグの合間にサイドステップ、腿揚げ走、スキップ、バック走などを入れて徐々に気持ちを高めてゆく。最後は踏み切った後の空中姿勢をイメージしながらウォーキング。

次に校舎側の直線コースで助走のイメージトレーニングをする。

Kは17歩で踏み切る。踏切足は左だ。1、2、3、4でスピードをのせるための走りに切り替える決心をする。

5、6、7、8、9、10、11、12、13、14までで跳ぶためのトップスピードにもってゆく。まとめはタ、タ、ターン。

幅20センチの踏切ラインをスパイクのつま先が踏んで跳べればまずまずだ。

助走のスタートライン近くでストレッチをする。また、くみこのことを思う。

使い古された砂場は雨水で土が混入し固くなる。くみこはそんなことがいやなのではない。砂と土が混ざった様子があの日を思い出させるからいやなのだ。私は砂場に対してそんな感情を抱く者がいることすらイメージできなかった。くみこに出会うまでは。

Kはストレッチを終え、30メートルのラインに立つ。左足が前だ。息を静かに吸い込むとやや大股でスタートする。短距離走とは違っている。5歩目からは腿を胸に引き付けるつもりで高く揚げて走る。そして、スピードをのせてゆく。

踏切ラインの白が視界から消える。

歩幅を縮めて、タ、タ、ターン。

跳ばずに砂場を駆け抜ける。

踏切位置に戻ったKは自らの踏切を確認する。およそ20センチ

チ手前だ。

もう一度同じスタート位置から助走して結果を確認する。1回目とほぼ同じ場所だ。

今度はスタート位置を20センチ前方にずらしてやってみた。結果は、踏切ライン上の先端から5センチ手前に踏切の痕跡を残すことができた。よし。

せんどうくみこは4月に転校してきた。

クラス替えのなかった子どもたちは、さっそくくみこを誘って休み時間に鬼ごっこをした。

Kは最初外に出ず職員室から様子を窺っていた。やがてオニになったくみこが走り出すのを見たKは自分の目を疑った。

速い。半端じゃない速さだ。

1年生からずっと運動会のリレー選手に選ばれているミキが、あっという間に追いつかれる。

Kは鳥肌が立つのを感じて、急いで運動場に飛び出していった。

先生も入れてね、オニになるからと言ってくみこを追いかけた。思い切って加速してみたが容易には追いつかなかった。

せんどうくみこは、そんなふうにしてKのクラスに入ってきた。

踏切が合ってきたのでまず一本跳んでみる。

スタート位置に戻りながら何度も空中姿勢を確認した。

振り上げた右足をふみおろすとともに、踏切足を引き上げ前に踏み出す。つまり走りの延長だ。

目線は前方上空。腕は体を引き上げた後、前から後ろへと大き

く動かす。

着地はできるだけ前に足を振り出す。

くみこのことを思う。あなたならきっと5メートルは跳べるはず。自己紹介のとき、走るのが得意ですとは言っていたが、幅跳びの面白さには気付いていないだろう。あなたは砂場に近寄れなくなっているのだから。

20センチ前方にずらしたスタート位置に立ち、大きく息を吸い込んで胸をそらす。

いつもの動作を体の奥底から繰り出してゆく。

遠い昔のコーチの言葉が蘇る。お前にはさみ跳びは無理なんだよ。5メートルしか跳べないくせになんで空中を歩くんだよ。馬鹿か。

Kはジュニアオリンピックで出した記録が優秀で特待生として陸上強豪校に進んだ。けれどコーチとそりが合わず1年で陸上は辞めた。特待生の枠からも外れ学業に打ち込んだ。

踏切ラインの白が視界から消え、リズム良く跳び出した。私のために跳ぶのだということをKは理解している。

空中で、1歩、2歩歩いて、いや走って大きく足を振り出した。砂場に引いた6メートルラインは、わずかな形の崩れも見せずKの後方に残っていた。

くみこはどう思うだろう。

囚われ続けている記憶に簡単に打ち克てるとは思わない。けれど、これがくみこのリスタートになることを願う。

教職に就いてから、やっと中学時代まで良好な関係だった走り幅跳びと再会することができた。記録も大幅に伸びている。

実測で6メートルを超えることは難しくはなくなった。

子どもたちを砂場の脇に座らせてKが跳ぶ。Kは子どもたちの頭上を越え大空に飛んでゆく。砂場に着地しても、子どもたちにとって砂場はないに等しい。くみこをあの日に縛り付けて離さない砂場は、もうない。

Kはそれを願う。それができないのなら私には教師としての資格がないのだと。

Kは、クラスの子たちがせんだうくみこに付けた「おせんちゃん」というニックネームの毒に気付かずにいた。足の速い活発な転入生はすぐクラスに溶け込み、ニックネームで親しげに呼ばれている。Kはそう思って安心し切っていた。くみこが次第に外遊びをしなくなり、教室で一人静かに読書をしている様子に気付くまで。

Kは思う。

私が跳ぶことでくみこのスイッチをオンにする。くみこは記憶の中で蟠っている砂混じりのぐちゃぐちゃのヘドロに囚われている。そのヘドロを跳び越えさせてやりたい。彼女にはその力があるのだ。クラスの子たちに芽生えた毒は必ず消える。毒を消した後にはより親密で強固な関係が生まれるはずだ。

もう一本跳んでみよう。

Kはもうくみこのことは考えていない。いつものルーティーンを終えスタートする。空がすっかり暗くなってきていることに気付いた。踏切ラインの白が視界から消える。

左脚は力強く地面を叩き、体が伸び上がるのを親指の先までもが感じ取っていた。

Kは空中を走った。

1 歩、2 歩、3 歩。

5メートルしか跳べないくせに歩くんじゃねえよ。コーチの言葉がまた蘇る。そり跳びでいいんだよ。そり跳びで。

Kは空中遊泳をしたかった。記録以前の問題として好きなフォームで跳びたかった。憧れだったカール・ルイスのように。

失敗したことの無い人間は成功することもない。

着地して振り向くと、6メートルラインは夕闇の砂場に原型を留めてくっきりと浮かび上がっていた。